佐世保市への移住と宗教コミュニティの形成

叶　堂　隆　三

目　次

はじめに
1　農村―都市移動と職業移動―都市移住の検証
2　明治・大正・昭和初期における信徒の移動と職業状況
3　明治・大正・昭和初期における宗教共同体の形成―教区主導と信徒主導
4　第二次世界大戦後における信徒の移動と職業状況
5　第二次世界大戦後における宗教共同体の形成―外国修道会・戦後開拓地・炭鉱
6　都市・都市周辺部への移動と宗教コミュニティ形成

はじめに

明治中期、佐世保市に海軍鎮守府・海軍工廠が開設され、軍需産業が発展する。明治後期の市制施行後も軍港・工業化が進行し、鎮守府開設前の4千人弱の人口はわずか10年後に10倍、さらに周辺地区と合併が進み大正末期に14万人に達する。

この佐世保市には、人口が集積する1930年代以降に設立された教会が多い。教会設立ラッシュの背景として、軍港の拡充・工業化の著しい佐世保市・周辺部に労働力として長崎県内のカトリック信徒の流入が指摘される。

しかし、長崎県の半島・離島出身の信徒の移動の特徴は、農業志向・集団移住である。そのため、たとえ第二次産業への参入が所与とされる都市部への移住でも、開拓移住の見地から検証することが必要である。本稿では、佐世保市各地区の地域展開を跡づけながら、カトリック信徒の佐世保市・周辺部への移住の目的およびコミュニティ形成の社会的特徴の解明をめざす。

1. 農村・都市間の移動と職業移動―都市移住の検証

明治中期、佐世保村は町制を経ることなく市制に移行する。急激な都市化・工業化を経験した佐世保市への流入人口は、二次産業への参入が当然とされる。その一方、長崎県の半島・離島出身のカトリック信徒の移動を特徴づけてきたのは、出身地の職業とコミュニティを継続しようとする志向である。この志向性に留意するなら、農村―都市の移動に随伴する産業間移動という一般論は検証される必要があろう。

佐世保市への移住

1898（明治22）年に海軍鎮守府が開府して以来、佐世保市は軍港・工業都市として発展する。市制施行後の佐世保市の人口急増に対応して、表1のように旧市街地・周辺の合併地区等に多くのカトリック教会が設立される。佐世保地区で最も古い三浦町教会の場合、1890年に天満町に集会所（祈りの間）が設立され、6年後に谷郷教会、さらに昭和初期に三浦町教会が設立される。このあわただしい展開に、大労働市場となった佐世保市にカトリック信徒が労働力として流入していく様子が映し出される。

しかし、長崎県の半島・離島のカトリック信徒の信仰の特徴は、信仰と生産活動が一致する意図的コミュニティへの所属であり、その移動の特徴は、出身地と同じ農業を志向する集団的・連鎖的移動である。そのため、移動先でも出身地と同様の意図的コミュニティ形成の志向性が確認されてきた。

こうした特徴をもつ長崎の半島・離島の信徒のすべてが、その志向性に反して第二次産業の労働力として佐世保市に流入したと見るのは、疑問である。類縁関係の制度化（教会の設立）に関して、表1の佐世保市・周辺部の数多くの教会の設立が第二次・第三次産業等に従事する信徒が主体となるものかど

表１　佐世保市の市勢の展開と教会の設立

年代		1890 年代	1900 年代	1910 年代	1920 年代	1930 年代	1940 年代	1950 年代	1960 年代	1970 年～
市制の展開		1899 年市制			日宇村・佐世村と合併	相浦町と合併	早岐町・大野町・皆瀬村・中里村と合併	柚木村・黒島村を編入		
人口		45766 人			133581 人	190418 人	266269 人	242654 人		
周辺地区の事項					早岐村・広田村が合併し早岐町となる	大野村に炭鉱開坑、軽便鉄道開通				
旧佐世保村	旧佐世保市	祈りの間（天満町） ⇒民家御堂 ⇒谷郷教会	⇒		**三浦町教会**	松山教会	⇒	**俵町教会**	**烏帽子教会**	
	旧佐世村				（三浦町教会）					
旧日宇村								（三浦町教会）		**天神教会**
旧皆瀬村							（俵町教会）	**皆瀬教会**		
旧大野町・旧柚木村							（皆瀬教会）	（皆瀬教会） 牟田ノ原教会	**大野教会**	
佐々町・旧世知原町							（皆瀬教会）	世知原地区・芳の浦地区・里山地区		
産炭地										
旧早岐町							（三浦町教会）		**早岐教会**	
旧相浦町	相浦・大崎	民家御堂			大潟で民家御堂 大崎に聖堂（説教所）60 世帯	（大崎教会） （浅子教会）	**相浦教会** **大崎教会**	棚方仮教会		
	船越・鹿子前					尾立山集会場（三浦町教会）	**船越教会**		（船越教会）	**鹿子前教会**
	浅子		梶ノ浦教会 ⇒		**浅子教会**					
旧小佐々町	長崎山							（浅子教会）		**横浦教会**

注：太字は現在の教会。黒島および平成の合併地区は省略している。
　：（　）内の教会は、所属の小教区・教会を示す。

うか、あらためて検証する必要があろう。

本稿の目的

本稿は、意図的コミュニティ形成の志向性という観点から、長崎の半島・離島出身のカトリック信徒の都市および周辺部への移動と宗教コミュニティの形成の検証を目的とする。具体的には、以下の3点の解明をめざす。すなわち、

第一は、佐世保市の各教会が立地する地区の地域展開である。

第二は、佐世保市の各地区への長崎の信徒の移動と職業状況である。

第三は、佐世保市の各教会の形成の経緯と教会間関係である。

本稿は、第1節で、第一の目的に対応して、佐世保市の都市発展を概略する。次に第二の目的に対応して、第2節で明治・大正・昭和初期、第4節で第二次世界大戦後の長崎の信徒の各地区への移住と職業状況を跡づける。さらに第三の目的に対応して、第3節で明治・大正・昭和初期、第5節で第二次世界大戦後の佐世保市・周辺部の教会形成の過程を明らかにする。最後に第6節で、佐世保市への長崎の信徒の移動の状況と宗教コミュニティ形成の社会的特徴を検討する。

佐世保市における都市・産業の展開

まず海軍鎮守府開設後の佐世保市の都市展開に関して、旧佐世保村の市制への移行と周辺部との合併を概略し、次に鉱工業と農業を中心に産業展開を跡づけたい。

①都市の展開と周辺地区との合併

佐世保市は1889（明治22）年に軍港に指定され、翌年に海軍鎮守府・造船部（海軍工廠の前身）が開府・開設される。その4、5年前（1884年）の佐世保村の人口（3765人）が、軍港指定の前年に7168人（1320世帯）、鎮守府開設の10年後の1900（明治33）年に4万人に急増する（佐世保市史政治行政編17頁）。

こうした人口の急増を背景に、市制施行の機運が佐世保村に生じる。しかし、急激な都市化・市街地化の進行は海岸地域に限定され、周辺（東北部）は農村地域にとどまっていたため、周辺の横尾免・山中免・熊ケ倉免を分村（佐世村）し、1899（明治32）年、佐世保村は市制を施行する。この事情のため、当時の市域は東西約4km、南北約10kmと非常に狭小である。

その後の周辺部との合併と人口動向は、表1の通りである。まず1927（昭和2）年に佐世保市に東接する日宇村および分村した佐世村と合併する。この当時、佐世保市の市街地は日宇村および佐世村の佐世保川流域とつながり、市村の境界が判別できない状況にあった（佐世保市史政治行政編175頁）。

次に、第二次世界大戦直前の1938（昭和13）年、西接の相浦町と合併する。当時の相浦町は石炭積出港・漁業基地として人口が集積し、佐世保市との間が道路と軽便鉄道で結ばれている。佐世保市の海軍施設の相浦地区への拡張期で、合併は海軍の要望をうけたものである。相浦町との合併で佐世保市の人口は、190418人に増加する（佐世保市史政治行政編223–228頁）。

さらに第二次世界大戦中の1941（昭和16）に佐世保市は早岐町・大野町・皆瀬村・中里村と合併する。日宇地区に隣接する早岐町は北松地区の交通の要衝で、合併当時の人口は約1万人に及ぶ。佐世保市北部に接する大野町・皆瀬村・中里村は農村地域であるものの、石炭産業の勃興と軽便鉄道の開通で人口増加期であった。大野の人口は1万に達し1940（昭和15）年に町制に移行している。この2町2村との合併で佐世保市の人口は、266269人に達する（佐世保市史政治行政編245–259頁）。

第二次世界大戦後も周辺部との合併が進む。町村合併促進法をうけて、1954（昭和29）年、佐世保市は北接の柚木村と相浦地区沖の黒島村を編入合併する（佐世保市史政治行政編431–441頁）。さらに1958（昭和33）年、佐世保市東南部の江上村・崎針尾村・東北部の折尾瀬村・宮村（いずれも東彼杵郡）を編入合併する。平成期に入って2005（平成17）年に北松浦郡吉井町・世知原町、2006年に小佐々町・五島列島北部の宇久町、2010年に江迎町・鹿町町を編入合併する。現在の佐世保市の人口は253000人である。

②海軍工廠と鉱工業

次に、佐世保市の人口急増の要因である工業展開にふれたい。明治中期の軍鎮守府・造船部（海軍工廠の前身）の開府・開設を契機に、民間産業が発展する。海軍工廠は、1892（明治26）年、造船部のドック建設に始まり、1895（明治28）年に本格的な造船が開始する。工員数は1906（明治39）

年に 7071 人、さらに大正期（1921 年）に 12049 人に達する。その後、ワシントン軍縮会議による大幅な人員削減（大正末年には 7840 人）に直面するものの、第二次世界大戦前の昭和期に急増する。

一方、明治・大正期の佐世保市の民間産業は、急激な都市化にともなう土木建設業と海軍を取引先とする食品産業や海軍工廠の下請けの鉄鋼業である。

食品産業の第一は、醤油の醸造である。1887（明治 20）年、福岡県筑後の出身者が天満町に丸善醤油を開業したのが嚆矢である。醤油の醸造所数は明治末年に 6、大正期に 13 に増加し、佐世保市を代表する産業に発展する。清酒の醸造・菓子製造は海軍の需要に対応したもので、佐世保の重要な産業に成長する。また石鹸・ガラスの製造も佐世保市の主要産業になる（佐世保市史産業経済篇 155–189 頁）。

さらに、明治・大正期、石炭の生産は北松地区で広く行われ、北松浦郡鹿町（現佐世保市）の鹿町炭鉱、佐々町の神田炭鉱・芳の浦炭鉱、江迎町（現佐世保市）の潜竜炭鉱等で大規模な生産が開始する。しかし昭和初期の旧佐世保市内の炭鉱は、小佐世保・中通・名切・日宇の各地区に 8 鉱が創業していたものの、小規模で経営も不安定であった。

第二次世界大戦後、佐世保市の発展の中心であった海軍工廠は解体となる。しかし、その造船部門の施設を利用して、佐世保船舶工業株式会社（SSK）が創設される。厳しい経営が続くものの、佐世保が朝鮮戦争（1950 年）の連合国海軍基地になったことで SSK は経営を安定させ、佐世保市に特需景気が訪れる（佐世保市史産業経済篇 217 頁）。

なお、第二次世界大戦後の佐世保市における石炭の産出は、軍による土地利用の制限が解除され 34 鉱が創業する。しかし規模は小規模なものであった。

③農業

海軍鎮守府・工廠の開府・開設後、佐世保村で農地の宅地化が急激に進む。図 1 は、市制施行時の佐世保市および分村した佐世村の土地利用である。佐世保市の西海岸に海軍鎮守府・工廠が立地し、中央部の海岸と奥の二つの谷（谷郷・名切）に市街地が形成される。農地が残るのは、市街地奥から佐世村にまたがる丘陵・山岳地帯の一部である。こうした都市化の結果、明治後期の農家比率は総戸数の 2%に低下する。

しかし、海軍・工廠の立地や急激な都市化は、佐世保市に近郊型農業の需要を高め、大正期になると農家数が増加に転じる。平地の水田面積は減少をつづけるものの、山林原野の開発・開拓が進み農地は 46 町歩増加する。その一方、大正期の農地の所有状況は、自作農が減少して小作農が増加し、農地面積で約 2 対 1 の比率になる（佐世保市史産業経済篇 321–333 頁）。この時期に発行された『佐世保郷土誌』（1919 年）に「山林原野 400 町歩の内には開墾に適する土地少なからずこれらを整理して園芸地と為し適応の作物を奨励して土地経済の道を講するは寧ろ本市農業の改善を図るの道」（153 頁）とあり、開拓・開墾の重要性が指摘されている。

昭和期になると、佐世村と日宇村との合併で農家数がさらに増加し、1927（昭和 2）の農家比率は 7.2%に上昇する。その一方、小作農家は 4 割に及ぶ。さらに農業が主産業の早岐町・大野町・皆瀬村・中里村との合併で、佐世保市の農家比率は 1 割近くに達し、農業は佐世保市の主要産業の一つに回復する（佐世保市史産業経済篇 335–338 頁）。

第二次世界大戦後には、開拓地と旧軍用地の利用で佐世保市内の農地が拡大する。表 2 の①は開墾助成法に基づく奨励金交付地区名、②は自作農創設特別措置法に基づく開拓農業組合、③は旧軍用地の農地開放地である。

このうち①は、大正・第二次世界大戦前の大正・

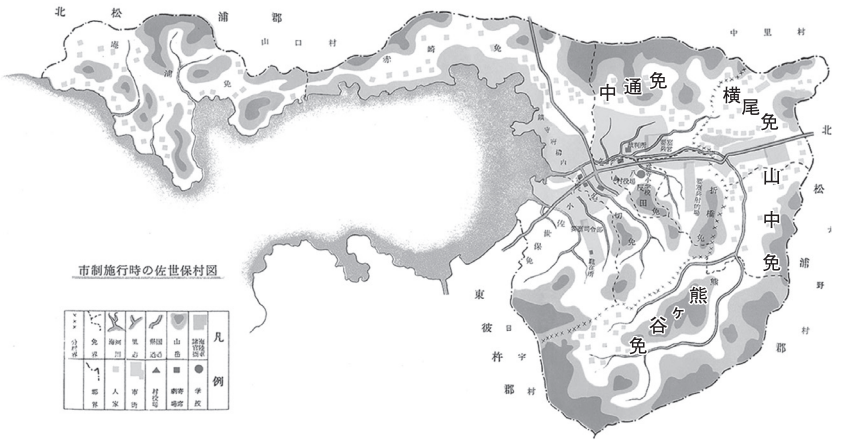


図 1　旧佐世保市の土地利用
出典：『佐世保市史政治行政篇』（24–25 頁）

表 2　佐世保市および周辺の開拓地・開放地

①開墾助成法に基づく奨励金交付地区

村名	開墾地名
江上村	指方耕地整理組合
吉井村	高峰第二耕地整理共同施行
	福井第二耕地整理組合
世知原村	村上野原免第二耕地整理組合
	開作免第二耕地整理組合
	赤木場免耕地整理組合
	平川原耕地整理組合
上志佐村	赤木耕地整理組合
	鳥渡馬伏耕地整理組合
江迎村	長坂中尾耕地整理組合
	太平耕地整理組合
	山口耕地整理共同施行

出典：『開墾地移住二関スル調査（第 2 輯』（72–73 頁）
注　：吉井村の「高峰」は、出典には「大峰」と記されている。 しかし、地元資料等での確認で「高峰」に訂正 した。

②自作農創設特別措置法に基づく開拓農業組合

市町村名	開拓地名	世帯数
佐世保市	烏帽子	36
	二ツ岳	3
崎針尾村	大崎	7
宮村	宮村	11
江迎村	白岳原	34
	石森	20
世知原町	板山原	7
佐々町	牟田原	23
	盲ヶ原	8
鹿町町	鹿町町	19
小佐々	小佐々	40
吉井町	吉井	7
柚木村	柚木	4

出典：『長崎県農地改革史』（211–212 頁）
注　：佐世保市・佐々町以外は旧町村名でいずれも現在は佐世保市内である。

③旧軍用地の開放地

地区	所在地	地区	戸数
早岐	下苗手	下苗手	17
	權常寺町	權常寺	7
	陣ノ内免	海軍共済病院跡	10
日宇	大塔町	大塔	6
	白岳町	白岳	43
	大黒町	海軍射撃場跡	14
	東浜町	東浦材料集積場	15
	白岳町	二一空工日宇分工場	10
	黒髪町	菫ケ岡倉庫	20
	天神町	天神岳砲台	31
	大和町	日宇村材置場	22
	大塔町・白岳町	尼潟火薬庫	76
	黒髪町	菫ケ岡工員宿舎	19
中通免	大久保町	桜台砲台	6
横尾免	横尾町	前岳砲台	50
赤崎免	下船越免	海軍工廠船越	11
庵ノ浦免	庵ノ浦免	庵ノ浦機銃陣地	3
	庵ノ浦免	庵ノ浦高角砲台	62
	下俵ヶ浦免	向後崎防築区	14
	下俵ヶ浦免	向後崎砲台	17
	下俵ヶ浦免	馬川兵舎	32
	下俵ヶ浦免	丸出山砲台	55
	下俵ヶ浦免	小首堡塁	15
母ケ浦免	母ケ浦免	母ケ浦工員養成所	47
日野	下北平免	鴛之浦工場	137
	上北平免	牽牛崎砲台	41
高島免	高島免	高島砲台	5

出典：『佐世保市史産業経済編』（348–350 頁）

昭和期に実施される。現在の佐世保市東部では早岐近辺の指方が開拓地に指定され、現在の佐世保市北部では大野・柚木地区の北方の丘陵・山岳地帯の上野原・開作・赤木場・平川原、皆瀬地区の北方の丘陵・山岳地帯の高峰・福井が開拓地に指定される。

②は第二次世界大戦後に実施される。佐世保市内の開拓地の烏帽子岳は佐世保市中央の海岸地区の後背をなす 568 mの山で、二ツ岳は早岐近辺の山の中腹である。

佐世保市の東部の早岐近辺では大崎・宮村の開拓地が指定され、現在の佐世保市北部の柚木地区・大野地区の北方の板山原、皆瀬地区の北方の牟田原・吉井、佐世保市西部の相浦地区の西方の小佐々（長崎山）が指定される。

③は、旧海軍用地を農家に開放したもので、27 地区で 793 世帯が増反（開墾）をめざした。日宇地区 10、庵ノ浦地区 7、早岐地区 3 が多く、旧海軍用地のため海岸、とりわけ半島地区等の開放が目立つ。

さらに、第二次世界大戦開戦後、農地改革が実施される。佐世保市は比較的自作農の割合が高かったとされるが、早岐地区における小作の割合はかなり高いものであった（佐世保市史産業経済篇 345–352 頁）。

④周辺部の状況

図 2 は、高度経済成長期直前の佐世保市の工場分布である。佐世保市の主産業の金属機械製造が中央部西側の海岸地域に立地し、明治中期以降に主産業となった食料品製造も中央部に集中する。周辺部では、日宇地区・相浦地区に若干の金属機械製造・食料品製造等が見られ、さらに数は少ないものの皆瀬地区・大野地区に工場が散見される。

一方、昭和 30 年代までの佐世保市の農業は、「中里、皆瀬、大野、柚木などの純農村型、旧市内の純都市近郊農業型、相浦、日宇の中間型」（佐世保市史産業経済篇 364 頁）と区分され、周辺部では農業地区の色合いが強かったことが分かる。

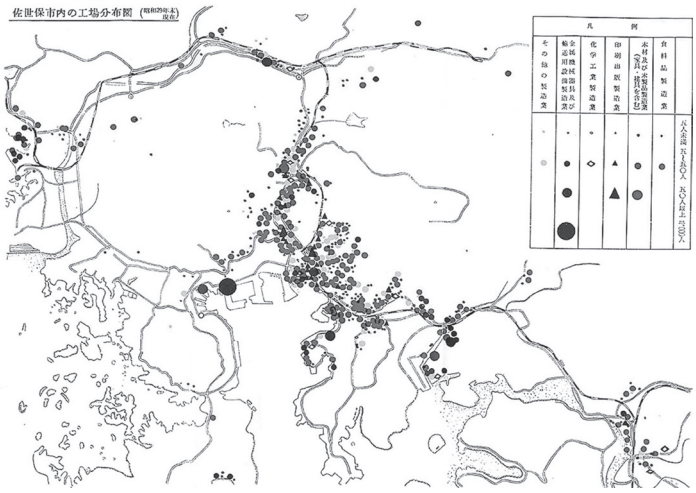


図 2　佐世保市内の工場分布（1954 年）
出典：『佐世保市史産業経済篇（232–233 頁）

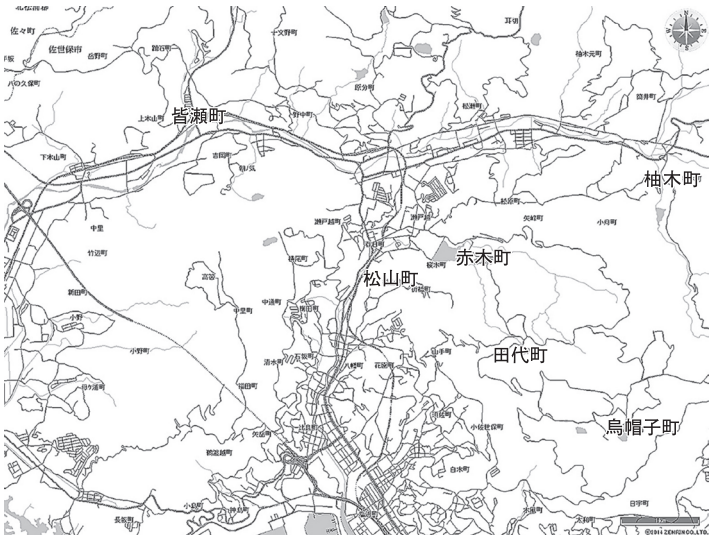


図 3　佐世保市中心地区・北部

2. 明治・大正・昭和初期における信徒の移動と職業状況

編入合併の黒島地区を除き、佐世保市に江戸期の潜伏キリシタン集落は見当たらない。佐世保市内・周辺部の教会周辺の集住地は、江戸末期･明治以降の移住地である。

佐世保市中心部（旧佐世保村）では、海軍鎮守府開府の翌年に祈りの間が開設され、数世帯の信徒が集会したのが、最初の記録である。その数年後、谷郷町に仮聖堂が設立され、佐世保村に西彼村・大島村・佐々村・神崎村・褥崎・相ノ浦地区の梶ノ浦（浅子）・大崎を加えた新小教区が発足する(大野カトリック教会 4 頁)。そのため、明治中後期には、当時の市内と相浦地区に信徒が居住していたことが明らかである。

大正 10 年生れの三浦町教会の長老の記

憶によれば、昭和初期、小学校の同級生（信徒）は五島出身者が最も多く、次に長崎市（浦上地区）出身者が多かったという。長崎市（外海地区）出身者もいて、小学校の同級生の親の多くは軍関係の仕事だった[1]。

長老の母親は外海地区（黒崎）の出身で、祖父母が佐世保市に来て商売を始める。佐世保には黒崎出身者が多く、軍港関係の仕事に従事していた。

長老の父親は福岡県大牟田の農家の三男で、軍隊を除隊した後、佐世保の丸善醤油で働く。開業当初の丸善醤油はもろみを築後から取り寄せて製造していたが、数年後に本格的な製造を開始し、その後、醤油製造の主導企業になる（佐世保市史産業経済篇162–163頁）。長老の父親が就業した時期には、現在の佐世保市日宇地区白岳に移転していたと見られる。当時の丸善醤油では40人ぐらいが働き、福岡県の出身者が多かったという。

昭和初期の職業状況に関して「海軍工廠の7時10分の出勤時限……5時から起きて薪で炊いた朝飯を食べさせられ、弁当を持って歩いて出勤していたような信徒家族」（俵町小教区50年誌49頁）と記され、海軍工廠関係に勤める信徒世帯が中心地区に居住していたことがうかがえる。

表3　俵町教会の信徒居住地（一部）

町名	教会地区名	世帯数	人数
烏帽子町・田代町	ミカエル地区	14	59
桜木町・赤木町	マテオ地区	16	54
横尾町	マリア地区	24	75
松山町	ペトロ地区	16	44
	マルコ地区	17	38
	ルカ地区	13	39

注：『俵町小教区50年誌』149–155頁を集計したものである。

表4　俵町教会管轄地の農業世帯数

		1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
田代	総戸数	27	23	40	28	32
	農家数	24	22	17	12	8
	農家比率	88.9	95.7	42.5	42.9	25.0
赤木	総戸数	32	36	35	43	96
	農家数	30	24	14	12	6
	農家比率	93.8	66.7	40.0	27.9	6.3
横尾	総戸数	800	900	1133	1153	1306
	農家数	73	58	40	28	12
	農家比率	9.1	6.4	3.5	2.4	0.9
松山	総戸数	–	–	–	469	550
	農家数	–	–	10	9	8
	農家比率	–	–	–	1.9	1.5

出典：『2010年世界農林業センサス農業集落カード』
注　：2005年以降の農家数は、販売農家数。

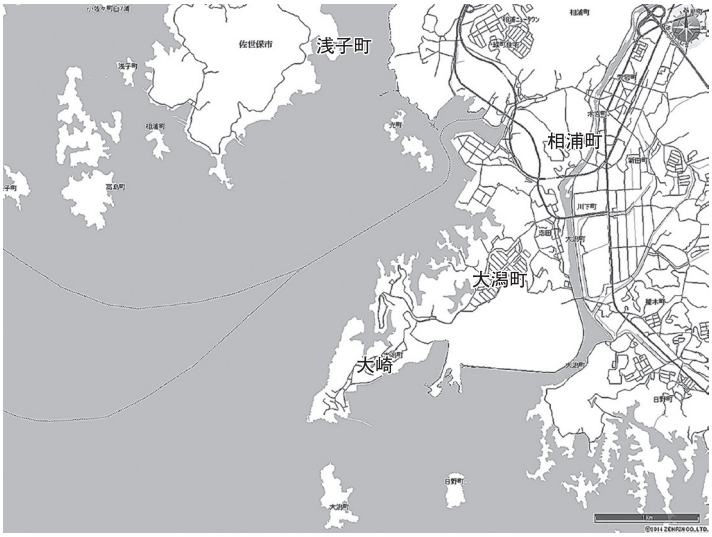


図4　相浦地区

旧佐世保市北部・山間地区

その一方で、1929（昭和4）年生れのシスターの手記に「私は田代町に住む……百姓の娘……でございます。当時は松山カトリック教会に通っておりました」（俵町小教区50年誌41頁）とあり、松山教会の信徒世帯に農家が含まれていたことが分かる。

松山教会（現在の俵町教会）は図3の旧佐世保市中心部および北部を管轄とし、巡回教会の烏帽子教会を含めて12地区に区分される。表3は、そのうちの6地区の世帯数である。一方、表4は、世界農林業センサスに掲載されている俵町教会の管轄の田代・赤木・横尾・松山の状況である。1970年の農家比率を見ると、田代88.9％、赤木93.8％、横尾9.1％で、少なくともミカエル地区の田代、マテオ地区の赤木地区の信徒世帯の大半が佐世保市中心部北側で農業に従事していたといえよう。

相浦地区

図4の相浦地区（大潟町）は、江戸後期、後背の山地の土を海岸に入れる水田整備・農地改良が行なわれ、大正・昭和初期、大規模な小作地が存在した。こうした小作地の中には、小作争議の発生のために小作

表 5　褥崎教会から佐世保市への転出（1921 年～ 1953 年）

	明治期	大正期	昭和期		時期不明	備考
			戦前期	戦後期		
浅子（梶ノ浦）	2	−	−	−	−	瓦職人
相浦	−	1	2	1	−	戦後期は加勢炭鉱を経て
相浦（日野）	−	−	−	1	1	
船越（鴛浦）	−	−	−	−	2	
佐世保	−	−	1	2	−	

注：『褥崎 128 年−褥崎小教区沿革史』102−106 頁を集計したものである。

図 5　船越地区

表 6　船越地区等の農家世帯数

		1970 年	1980 年	1990 年	2000 年	2010 年
船越	総戸数	340	567	710	831	961
	農家数	132	95	35	28	4
	農家比率	38.8	16.8	4.9	3.4	0.4
下船越	総戸数	−	−	−	−	107
	農家数	−	−	−	−	3
	農家比率	−	−	−	−	2.8
庵浦	総戸数	142	140	150	149	184
	農家数	71	40	25	13	4
	農家比率	50.0	28.6	16.7	8.7	2.2
野崎	総戸数	71	81	73	78	262
	農家数	61	55	33	20	5
	農家比率	85.9	67.9	45.2	25.6	1.9
俵ヶ浦	総戸数	160	160	155	144	219
	農家数	101	68	44	38	18
	農家比率	63.1	42.5	28.4	26.4	8.2

出典：『2010 年世界農林業センサス農業集落カード』
注　：2005 年以降の農家数は、販売農家数。

人が入れ替わっているところも多い（相浦郷土史 188−9 頁）。

『相浦郷土史』（1993 年）に「明治 39 年に平戸よりカトリック信者の久家三喜松さん一家が移住し、西彼大島より、中村新太郎さんの家族ほかが移住し、明治 42 年頃までに 8 世帯位の信者が相浦にも住むようになった」（304 頁）とある。1930 年代前半（昭和 7.8 年頃）に信徒世帯は、40 世帯に増加する（相浦カトリック教会献堂 25 年誌 5 頁）。第二次世界大戦直前の海軍による農地接収で他出を余儀なくされた信徒世帯があることから、戦前期、大半の信徒世帯が農業に従事していたと推測される（叶堂 2014 年 18 頁）。

表 5 は、褥崎教会から佐世保市への挙家の他出世帯である。一小教区から大正・昭和初期だけで相浦地区に 3 世帯が移住している。他の小教区を合わせれば、相当の信徒世帯が流入したと推測される。

相浦（大崎地区）にも大正期までに、金松家・中村家（黒島）・安永家・山本家・溝口家（黒島）・松本家などの信徒世帯が来住する。

大正期末から昭和初期に挙家で長崎港沖の高島から大崎に移住した 3 兄妹によれば、半農半漁の生活で、石が多い畑地のためイモや麦を植えていたという。兼業の漁業は一本釣り、樫網などであった。大崎地区に砥石用の石工場が進出したこともあって、当初の 8 世帯が 14、5 世帯に増え、さらに昭和 10 年代には 40 世帯ほどに増加する。とりわけ五島地方から岩村家・野中家・畠山家・松本家・松明家等が来住する（叶堂 2014 年 18 頁）[(2)]。

船越地区

図 5 の旧相浦町の船越地区も、農業地区である。第二次世界大戦中も軍需作業に従事しながら「町民一体となって田畑を耕作していた。終戦後、……一層農業に力を入れていたようだ」（船越郷土のあゆみ 22 頁）

とあり、また表6の世界農林業センサスでも、農家世帯は海軍施設（現在米軍施設）のある下船越をのぞき1970年の船越・庵浦・野崎・俵ヶ浦の農家比率は約4割～8割台で、農業地区であったことが裏づけられる。

また、船越地区には何人かの網元がいて、共同で船団を作り一船団5隻でハチダ（イワシ）漁をし、海岸でイリコを製造していることから、農業労働に加えて、漁労・イリコ製造の仕事があったことが分かる（船越郷土のあゆみ24頁）。

船越地区の鴛浦等に、五島地方・平戸島・黒島から信徒世帯が移住する。移住世帯の職業は、海軍関係や農業・漁業等である。1923（大正12）年に集会所（祈りの場）が設立されていることから（鹿子前小教区設立25周年記念誌24頁・よきおとずれ996号）、一定の信徒数に及んだと推測される。表5にも時期不明ながら一小教区から複数の世帯の移住が確認でき、他の小教区からも移住があったことが推測できる。

なお、高度経済成長期に佐世保市内に信友会（カトリック勤労者の会）が設立される（鹿子前小教区設立25周年記念誌24頁）。SSKの従業員主体で、船越教会の信徒が副会長に選出されている（三浦町カトリック教会献堂50年誌43頁）。高度経済成長期、通勤の便のよい船越地区（鹿子前）等で非農家世帯が増加したことの反映と推測される。

早岐地区

第二次世界大戦前、早岐地区の主産業は農業で、早岐地区を含む旧東彼杵郡は非常に高い小作比率であった（長崎県農地改革史134頁）。また戦後の自作農創設特別措置法に基づく開拓地に早岐地区の旧江上村の指方が指定されている。

表7は、世界農林業センサスの早岐地区の農家比率である。図6の早岐地区の地図で分かるように、現在でも農業が継続されている集落は、丘陵・山間の集落である。1970年の時点で農家が7割以上の集落が多く、平地に近い集落でも3～4割を占め、第二次世界大戦前の早岐地区が農業地区だったことがうかがえる。早岐近辺の旧折尾瀬村・旧江上村・旧崎針生村・旧宮村の農家比率は全般的に早岐を上回り、周辺部はさらに農業地区の色合い

表7　早岐地区等の農家世帯数

		1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
浦川内	総戸数	32	132	204	124	144
	農家数	29	25	21	12	8
	農家比率	90.6	18.9	10.3	9.7	5.6
中重尾	総戸数	49	43	27	101	148
	農家数	36	30	27	20	16
	農家比率	73.5	69.8	100.0	19.8	10.8
上重尾	総戸数	42	48	42	49	72
	農家数	34	38	29	27	18
	農家比率	81.0	79.2	69.0	55.1	25.0
下重尾	総戸数	44	57	100	118	173
	農家数	34	25	13	13	9
	農家比率	77.3	43.9	13.0	11.0	5.2
下苗手	総戸数	200	53	628	1002	942
	農家数	32	24	14	12	5
	農家比率	16.0	45.3	2.2	1.2	0.5
上原	総戸数	120	166	224	436	618
	農家数	47	40	31	25	14
	農家比率	39.2	24.1	13.8	5.7	2.3
平松	総戸数	60	60	61	73	74
	農家数	60	59	50	47	34
	農家比率	100.0	98.3	82.0	64.4	45.9
上陣ノ内	総戸数	61	255	268	310	266
	農家数	21	21	15	7	5
	農家比率	34.4	8.2	5.6	2.3	1.9

出典：『2010年世界農林業センサス農業集落カード』
注　：2005年以降の農家数は、販売農家数。

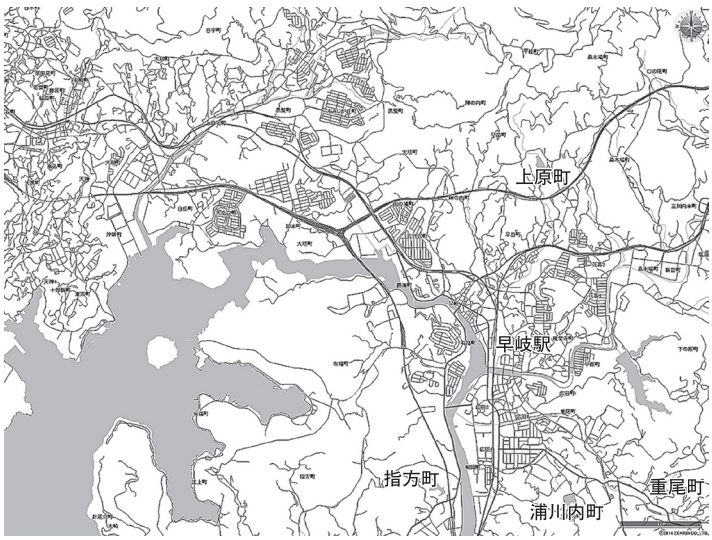


図6　早岐地区

が濃かったと推測される。

三浦町教会の長老の話から、外海地区の出身者が早岐近辺に移住した可能性がある。『よきおとずれ』（995 号）によれば、早岐小教区の巡回教会（川棚教会）のある川棚町に、第二次世界大戦前、信徒 2 世帯が居住している。

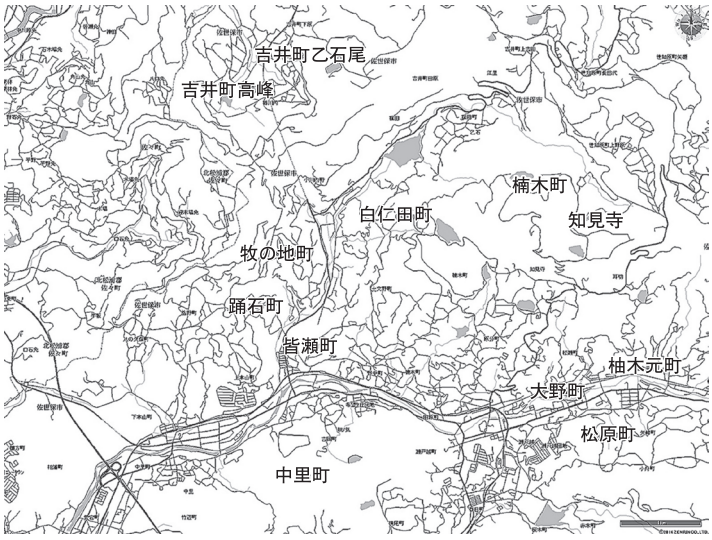


図７　佐世保市北部

表８　大野地区の農家世帯数

		1970 年	1980 年	1990 年	2000 年	2010 年
坂ノ下	総戸数	352	607	630	710	798
	農家数	34	21	11	11	5
	農家比率	9.7	3.5	1.7	1.5	0.6
坂ノ上	総戸数	250	507	611	762	1379
	農家数	53	41	33	32	7
	農家比率	21.2	8.1	5.4	4.2	0.5
峰	総戸数	147	386	230	315	387
	農家数	26	18	12	11	7
	農家比率	17.7	4.7	5.2	3.5	1.8
矢峰	総戸数	140	391	570	691	674
	農家数	22	20	17	16	4
	農家比率	15.7	5.1	3.0	2.3	0.6
松原	総戸数	50	388	450	387	507
	農家数	18	17	11	9	5
	農家比率	36.0	4.4	2.4	2.3	1.0
楠木	総戸数	14	25	45	35	109
	農家数	14	12	13	13	12
	農家比率	100.0	48.0	28.9	37.1	11.0
知見寺	総戸数	45	64	64	53	64
	農家数	33	33	26	20	17
	農家比率	73.3	51.6	40.6	37.7	26.6
板山	総戸数	9	9	7	8	6
	農家数	9	8	7	5	4
	農家比率	100.0	88.9	100.0	62.5	66.7

出典：『2010 年世界農林業センサス農業集落カード』
注　：2005 年以降の農家数は、販売農家数。

大野地区・皆瀬地区

1942（昭和 17）年に佐世保市と合併した大野地区は佐世保市北部に位置し、旧世知原町に接する。図 7 のように柚木地区・旧世知原町から連なる相ノ浦谷の周辺で、相浦（大野）川沿いに平地が広がる。国道 204 号線が佐世保市中心地区から伸び、大野地区は松浦鉄道の泉福寺・左石駅の立地する交通の要衝である。北部の山裾に開拓された知見寺・松瀬岡・原分岡・大野田原・原分田原の 5 免と東南部の丘陵に松原・矢峰・瀬戸瀬の 3 免がある（大野カトリック教会 15 頁）。大野地区手前の「堺木（西海学院）を過ぎると田舎の風景が広がっていた」（カトリック皆瀬教会創設 50 周年記念誌）とあり、大野・皆瀬地区は農村地域であった。

大野地区に「昭和の初期の頃より信者の人も少しずつ居た様」（大野カトリック教会創設 25 周年記念誌 15 頁）とあり、第二次世界大戦前の信徒の居住が判明する。『カトリック教報』（1976 年 6 月号）に「大野には、藤村五郎作という、善良な家族がいて、食糧不足のおりから、大変な援助を受けたものである。広い田畑を所有していて、白米や里芋をたびたび戴いた」という戦前の三浦町教会の主任司祭の手記があり、この地区の信徒の農業従事が確認できる。

なお、藤村姓に関して、『信仰告白 125 周年―黒島教会の歩み』に、外海地区樫山から黒島の名切集落に移住し、その中から藤村忠吉が平戸市田平地区に移住したことが記録され、『紐差小教区 100 年の歩み』にも平戸島紐差地区木ヶ津に藤村姓が見られる。大野教会での聞き取りでは、藤村家と紐差地区のつながりがうかがえた[(3)]。

表 8 は、世界農林業センサスの大野地区の農家比率である。大野地区の北部の集落で農家比率が高い。とりわけ楠木地区は 14 世帯すべてが農家である。10 年後の 1980 年代は総世帯が 25 世帯に増加し、そのうち農家が 12 世帯である。この当時の

表 9　皆瀬・中里地区の農家世帯数

		1970 年	1980 年	1990 年	2000 年	2010 年
浪瀬	総戸数	127	539	555	627	674
	農家数	14	14	7	6	6
	農家比率	11.0	2.6	1.3	1.0	0.9
踊石	総戸数	40	103	101	99	116
	農家数	29	23	19	19	14
	農家比率	72.5	22.3	18.8	19.2	12.1
牧の内	総戸数	61	42	130	184	191
	農家数	35	36	25	21	15
	農家比率	57.4	85.7	19.2	11.4	7.9
小川内	総戸数	70	64	65	58	64
	農家数	40	83	34	26	13
	農家比率	57.1	129.7	52.3	44.8	20.3
菰田	総戸数	48	49	41	44	49
	農家数	37	37	30	28	21
	農家比率	77.1	75.5	73.2	63.6	42.9
白仁田	総戸数	44	93	98	85	95
	農家数	37	36	33	35	25
	農家比率	84.1	38.7	33.7	41.2	26.3
十文野	総戸数	35	40	40	42	52
	農家数	30	28	26	20	13
	農家比率	85.7	70.0	65.0	47.6	25.0
野中	総戸数	7	232	320	463	579
	農家数	2	27	20	19	6
	農家比率	28.6	11.6	6.3	4.1	1.0
楠木	総戸数	–	–	–	–	109
	農家数	–	–	–	–	3
	農家比率	–	–	–	–	2.8
中里上	総戸数	120	291	300	366	339
	農家数	22	19	14	12	9
	農家比率	18.3	6.5	4.7	3.3	2.7
中里下	総戸数	231	272	267	269	308
	農家数	23	18	15	9	7
	農家比率	10.0	6.6	5.6	3.3	2.3
高筈	総戸数	9	8	8	9	8
	農家数	9	8	8	8	6
	農家比率	100.0	100.0	100.0	88.9	75.0
下本山	総戸数	140	220	344	423	533
	農家数	41	35	25	21	13
	農家比率	29.3	15.9	7.3	5.0	2.4
八ノ久保	総戸数	40	41	42	44	54
	農家数	38	35	29	23	16
	農家比率	95.0	85.4	69.0	52.3	29.6
岳野	総戸数	33	31	32	32	42
	農家数	4	26	25	21	21
	農家比率	12.1	83.9	78.1	65.6	50.0
上本山	総戸数	36	245	268	275	365
	農家数	29	23	25	24	16
	農家比率	80.6	9.4	9.3	8.7	4.4

出典：『2010 年世界農林業センサス農業集落カード』
注　：2005 年以降の農家数は、販売農家数。

カトリック世帯は 5 世帯である。相浦川の南側の丘陵地にも一定比率の農家があり、かつては相当高い農家比率であったと推測される。

1942（昭和 17）年に佐世保市と合併した皆瀬地区・中里地区は、大野地区の西に位置し、北側は旧吉井町、西側は佐々町に接する。相浦川沿いに平地があり、国道 204 号線で佐々方面とつながり、県道で北側の松浦市と結ばれる。また川沿いの平地に松浦鉄道の野中駅・皆瀬駅・中里駅・本山駅が並び、南北の山地に多くの集落が存在する。表 9 は、世界農林業センサスの皆瀬・中里地区の農家比率である。1970 年の相浦川北部の丘陵・山間集落の農家比率から農業世帯が多くを占めていたことが分かる。

大正期は「新教に属する者一人いたが詳細不明」（ふるさと皆瀬の郷土誌 98 頁）とあり、カトリック信徒は不在である。『カトリック皆瀬教会創設 50 周年記念誌』(2005 年）に初代婦人会長の手記が掲載され、1935（昭和 10）年に平戸島紐差地区から移住し、役牛一頭で農業に従事したと記されている。移住地は白仁田地区と推定されるが、移住当時、周囲には信徒世帯はなかったという。

天神地区

佐世保駅近くの崎辺半島の天神地区にも、第二次世界大戦前にカトリック信徒が移住したと推測される。図 8 のように、崎辺半島は佐世保駅近くに位置するものの、天神山・山城陣に連なる半島入口の急峻な崖山のために、長い間、佐世保地区との交通が遮断されていた。大正期に急勾配の道路が開通し、さらに戦前期になって切通しが開かれ、バスが運行する（烏帽子は見ていた 268 頁)。

崎辺半島は田 100 町歩・畑 100 町歩の農業地区で、漁業世帯はなかった。天神町は半島の台地にあたり、現在の天神教会（潮入り）の下側に棚田、上側に畑が広がっていた。大正期の世帯数は 125 世帯で、当時の地価は表 10 の通りである。田畑売買価

格の当時の全国平均が普通田1反706円、普通畑1反421円で、天神地区の田畑は全国平均の約3分の1の価格で、山林原野はさらに低価格である。

1960年代後半から天神地区を含む崎辺半島に住宅・アパート・市営団地が建築されるようになり、人口密集地区の一つになっている（烏帽子は見ていた266頁）。黒島地区・五島地方・平戸地区の信徒が移住しているものの、その時期は明確ではない（長崎巡礼センター40頁）。

図8　天神地区

表10　大正期の地価

	天神地区		皆瀬地区	大野地区
地目	価格（1坪）	1反	1反	1反
宅地	1円	−	−	−
田地	1等1円～3等60銭	300円～180円	309円	366円
畑地	1等70銭～6等20銭	210円～60円	75円	90円
山地	13銭	39円	12.5円	−
原野	10銭	30円	7.7円	−

注：『烏帽子岳は見ていた』266頁『ふるさと皆瀬の郷土誌』139頁『大野の郷土誌』193頁をもとに作成した。
：1反の価格は1反300坪で計算した。

3. 明治・大正・昭和初期における宗教共同体の形成―教区主導と信徒主導

明治中期以降、佐世保市は軍港・工業都市として発展する。佐世保市の人口急増に対応して、表11のように、仏教寺院・キリスト教教会等が相次いで設立される。カトリック教会は、表1のように市制施行後の旧市街地・周辺地区に集会場・仮聖堂等が次々設立される。その後、中心地区に本格的な教会が設立される。

三浦町教会は、長崎教区の県北の新たな拠点づくりという長崎教区の戦略的意図がうかがえる教会である。『三浦町カトリック教会献堂50周年史』所収の教会設立時の一文（「……帝国の軍港都市として、住民拾有参萬を擁せる佐世保市……長崎市に次ぐ県下唯一の都市が、この状態（「腐朽し盡したみすぼらしい、一神父の住宅にも足らない仮教会があるばかり」＝筆者注）では、折角出来た邦人教区の面目にも関する」）から、その意図は明らかである。建設費用も長崎市（浦上地区）の信徒の献金が大きい（叶堂2014年11頁）。

一方、佐世保市の周辺地区の教会設立では、移住した信徒の強い志向が反映する。この傾向は、開拓移住地等における集落教会の形成に類似する。

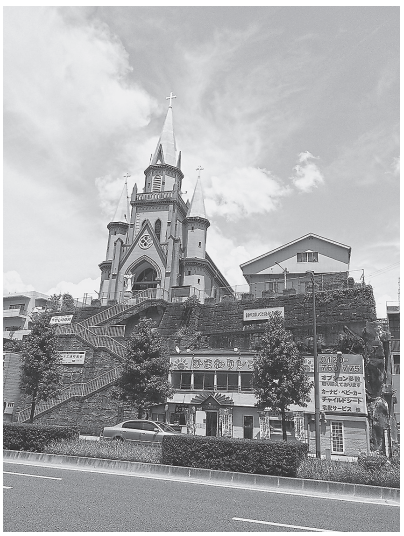
三浦町教会

旧佐世保村に集会施設が設立されるのは、明治中期（1890年）である。中心地区の天満町の検番跡に祈りの間ができ井手乙松ら数世帯が集まったという。1895（明治28）年に名切町の小柳宅二階に民家御堂が設立され、翌年（1896年）、あわただしく

表11　佐世保市における宗教施設の設立

	仏教						キリスト教					
	真宗系	真言宗系	日蓮宗	臨済宗	曹洞宗	その他	洗礼派	日本基督教会	聖公会	救世軍	天主公教	日本メゾジスト
1891年～1900年	2		−	−	−	1		−	−	−	1	−
1901年～1910年	5	1	1	2	1	1	1	−	−	−	−	−
1911年～1920年	1	3	2	1	1	1	−	−	1	1	−	−
時期不明	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1

注：『佐世保郷土誌』110-112頁を集計したものである。



三浦町教会

谷郷教会が設立される。谷郷教会は91坪、木造2階建ての古屋付きの借地であった（三浦町カトリック教会献堂50年誌9頁）[4]。その後、谷郷教会堂の老朽化を契機に教会新築が話題になり、谷郷町の北部の八幡町に敷地1572坪を購入する。谷郷教会敷地の売却金が、八幡町の土地購入に充てられている。

しかし、佐世保市を訪問した長崎司教の意向により、急遽、教会予定地を交通の要所の三浦町に変更する。三浦町に736坪の土地を購入し、1933（昭和6）年に三浦町教会が設立される。当時の信徒数は1170人である（三浦町カトリック教会献堂50年誌9頁）。

教会新築の背景に佐世保北部の信徒急増があり、谷郷町よりも地価が安く、広い敷地が確保できる八幡町に教会の新築を計画した地元側に対して、長崎教区は北松地区全体のセンターとして鉄道・船舶等の交通の拠点である三浦町を指示したと推測される。

三浦町教会は設立後に黒島小教区から独立し、黒島小教区の管轄のうち西彼杵村・大島村・佐々村・小佐々（神崎）・相浦（梶ノ浦・大崎）・鹿町（褥崎）を管轄とする（大野カトリック教会4頁）。松山教会の設立後は、三浦町教会の管轄は佐世保市役所の南側の日宇地区から船越地区手前の旧赤崎地区までになり、管轄を17地区に分けている。

俵町教会（松山教会）

三浦町教会の信徒のうち旧佐世保市北部に居住する6、70世帯は、信仰・親睦・死人講（葬儀組）を目的とした教友会を組織し、第二次世界大戦直前の1938（昭和13）年、中心部北側の松山町に教会が設立される（俵町小教区50年誌49頁）。八幡町の教会建設予定地を売却した金額（1万5千円）のうち5千円を松山町の敷地の購入に充て、購入した土地の一部の売却金（3千円）で教会・託児所（後に幼稚園）・司祭館を建設する（三浦町カトリック教会献堂50年誌10頁）。

俵町教会

三浦町時代、教友会は10世帯程度の下部単位で持ち回り例会を開催し、松山教会でもこの下部単位（隣組）が存続する。現在、表3に一部を示したように12の地区が存在する。

松山教会は第二次世界大戦中に兵舎として接収された後、戦後、幼稚園とともに再開するが、敷地の基盤の変動のため移転を余儀なくされる。国鉄松浦線（現在の北松浦鉄道）の北佐世保駅跡地の譲渡を国鉄門司鉄道局に要望し、1951（昭和26）年に松山教会の名称のままで旧駅舎に移転し、翌年に俵町カトリック教会に改称する。

なお、1950（昭和25）年から20年間、松山教会（後の俵町教会）は、後述するカナダのスカボロ外国宣教会の管轄になる。戦後期に特筆される俵町教会の活動は、1960（昭和35）年の共助組合の創設である。この共助組合は、日本における共助組合の発祥の一つとされる。カナダの教会ではクレジット・ユニオンが組織され、低利の融資によって信徒の経済生活の維持に貢献している。信徒の厳しい経済生活を知ったスカボロ外国宣教会の司祭が、経済問題の解消の方法としてこの制度を提案したものである。俵町教会の取り組みは、周辺の教会とともにスカボロ外国宣教会の司牧地である一宮カトリック教会等の共助組合につながる（俵町小教区50年誌78頁）。

相浦地区の教会―大崎教会・相浦教会・船越教会・浅子教会

大正期、相浦地区に60世帯350人の信徒が居住し、1923（大正12）年に大崎に教会が設立される（大野カトリック教会10頁）[5]。

大潟の信徒世帯は、1932（昭和 7）年頃に 40 世帯に増加している。大潟の信徒は、当時、大崎教会や佐世保の教会に通っていた。1938（昭和 13）年に大潟に民家御堂を設置し、浅子教会の司祭が巡回で日曜日のミサ・黙想会・子どもの要理教育等を行う。

都市化・工業化の進む大潟の信徒数が大崎を上回り、もはや民家御堂に信徒が収まらなくなる。当時の宿老が司教に教会建設の許可を求め、教会建設用の敷地として大潟の原野 500 坪を購入する。しかし、この原野は教会の敷地に適さなかったため、信徒の所有する畑地と交換し、海兵団の進出で立ち退きになった農家の廃材を利用して建築する。

佐世保市から教会の建設許可が下りなかったため、集落施設という名目で、1941（昭和 16）年、相浦カトリック教会が設立される（相浦カトリック教会献堂 25 年誌 7 頁）。同年（1940 年）、大崎でも教会が新築され、100 世帯 650 人に増加した相浦地区の信徒は、相浦教会 60 世帯 350 人、大崎教会 40 世帯 300 人に二分される（大野カトリック教会 10 頁）。

第二次世界大戦後に大潟で炭鉱が操業し、相浦教会の信徒数はさらに増加する。1950 年代前半には信者が聖堂の外にあふれる事態になり、炭鉱の協力で棚方地区の坑員集会所を棚方の仮教会とする。相浦教会の信者数は 200 世帯、800 人に達し、1952 年に炭鉱が閉山し棚方の仮教会の信徒が相浦教会に戻り、手狭になる。1 世帯 1 万円以上の拠出で新教会の建設を計画し、1960 年に新築する。この時期、信徒世帯を 17 に地区分けしている。大崎教会でも、1973 年に新しい教会が建設される（相浦カトリック教会献堂 25 年誌 8 頁）。

その後、1967 年　相浦地区に大水害があり、信徒が大きな被害を受け、バチカンから見舞金が贈られる。1974 年に相浦教会に共助組合が発足する。1970 年から聖母訪問会が幼稚園の経営を担当し、修道院を設立する（相浦カトリック教会献堂 25 年誌 16 頁）。

船越地区では、大正期（1923）年、現在の九十九島水族館付近の尾立山に集会所（祈りの場）が設立され、谷郷教会の巡回地に位置づけられる。しかし 1940（昭和 15）年、海軍施設拡充の為に立ち退きとなり、俵ヶ浦半島の丘の上に移転し、船越教会として三浦町教会の巡回教会になる（よきおとずれ 996 号）。第二次世界大戦後の 1962 年に船越教会は船越小教区として独立する（鹿子前小教区設立 25 周年記念誌 24 頁）。

浅子地区は旧相浦町に属するものの、相浦からは佐々浦の対岸にあたる。『長崎県世界遺産構成資産等基礎調査　地域・地区調査報告書　黒島地域』に「明治 17 年（1884）、生活のために漁場や炭坑、海軍関係の職を求めて黒島を離れた信徒が佐世保の浅子、大崎に移住した」（Ⅱ-37 頁）とあり、相浦（大崎）地区とともに明治期の信徒の移動が確認できる。

『褥崎 128 年―褥崎小教区沿革史―』によれば、浅子地区の梶ノ浦に炭鉱があり、1904 年にいち早く梶ノ浦教会が設立される。当時の 1 年間の梶ノ浦教会の幼児洗礼者数は 17.1 人で、褥崎 13.7 人・神崎 13.1 人・大崎 6.7 人のいずれの数値も上回り、この地区の信徒数が多かったことが裏づけられる（褥崎カトリック教会 62 頁）。表 5 の一小教区からの移動でもいち早い移動が確認される。なお、1928 年に教会は梶ノ浦から浅子に移転する。

4. 第二次世界大戦後における信徒の移動と職業状況

高度経済成長期（1960 年後半）以降、多くの信徒が挙家・離家の形態で第二次・第三次産業への就労を目的に佐世保市に流入したと推定される。その一方で、第二次世界大戦後期も営農目的の佐世保市・周辺部への開拓移住や戦前からの農業の継続が見られることも特徴である。

旧佐世保市内

戦前に移住した農業世帯が関係する終戦後の国の政策は、農地改革と旧軍用地の開放である。そのうち表 2 の③の旧軍用地の開放地は半島等が多いため、早岐近辺・天神地区・船越地区・横尾等に移住した農業世帯の中に耕地面積の拡大した世帯があったと推測される。

旧佐世保市内の開拓地（烏帽子地区）

佐世保市中心部では、背後にそびえる烏帽子岳が自作農創設特別措置法に基づく開拓地に指定される。1946 年、中腹（340 m）あたりに 20 世帯が入植し、1948 年に 6 世帯、1950 年に 1 世帯、1952 年 2 世帯、1953 年に 2 世帯がつづき昭和 20 年代に 31 世帯に

表 12　皆瀬教会地区別世帯数

地区	世帯数	町・市町村名
皆瀬１	11	皆瀬町
皆瀬２	7	皆瀬町
上本山	10	上本山町
中里	6	中里町
下本山	4	下本山町
吉岡西	9	吉岡町
吉岡東	11	吉岡町
野中	13	野中町
踊石	7	牧の地町・踊石町
山住	6	十文野町・白仁田町・菰田町
吉井	6	吉井町高峰
佐々	7	佐々町
地区外	3	佐世保市内
合計	100	

注：『カトリック皆瀬教会創立 50 周年誌』55–61 頁を集計したものである。

達する（佐世保市史産業経済篇 345 頁）。

烏帽子岳への平戸島紐差地区の信徒の開拓入植の時期は後発で、1954 年である。まず紐差教会の紐差地区の宿老であった糸永栄三郎家が子ども世帯とともに、一家二世帯で移住する。入植の理由に子ども・孫世代の教育・就職の機会が含まれる。糸永家の開拓入植が連鎖的移動を生じ、紐差地区の親戚や信徒が後続する。その結果、糸永栄三郎家（栄三郎と敬一の二世帯）・平本虎太郎・山頭冨士夫・橋口菊四郎・萩原儀信・萩原宗一・藤村佐一・萩原保義・糸永信義の 9 家（10 世帯）の規模となる（俵町小教区 50 年誌 71 頁）。

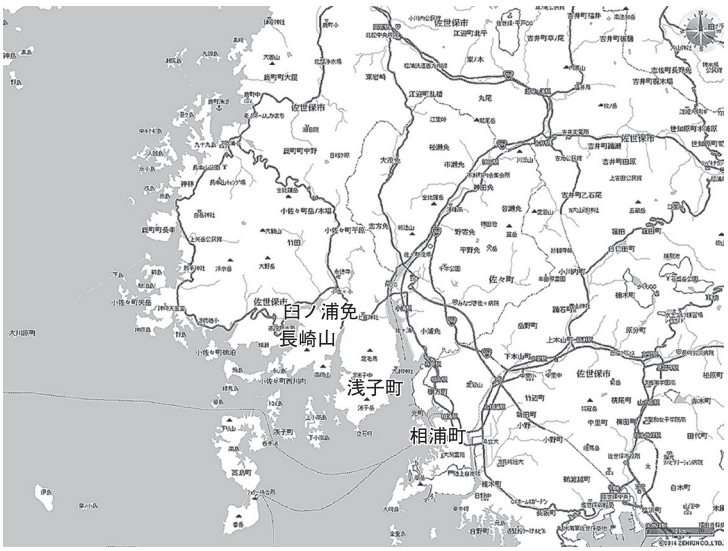


図９　小佐々地区（長崎山）

大野地区・皆瀬地区

第二次世界大戦後、大野地区に雪印乳業佐世保工場をはじめとする事業所が進出し、準工業地帯に指定される。県営・市営の住宅が建設され、商店・学校・病院も立地し、しだいに都市化が進行する（大野カトリック教会 18–38 頁）。

一方、終戦直後の皆瀬地区の状況をふり返り、一人の信徒が「農業で生計をたてている信者たちにとっては大変だったのです」（カトリック皆瀬教会創設 50 周年記念誌 27 頁）と記していること、表 9 の世界農林業センサスの農家比率からも、相浦川北部の丘陵地・山地に戦後も農業世帯が多かったことが分かる。

皆瀬地区の北西に位置する牟田ノ原は、佐々町との境界が中央部である（ふるさと皆瀬の郷土誌 1 頁）。自作農創設特別措置法に基づく牟田ノ原の開拓地の佐々町側に藤沢佐蔵がいち早く入植し、森嘉士馬がつづく。1955（昭和 30）年には、入植世帯 23 世帯、開墾面積 23 町歩（うち茶園 12 町歩）に広がる（佐々町郷土誌 195 頁）。この牟田ノ原の開拓農業協同組合の所在地は佐々町にあったものの、開拓地は佐々町と皆瀬地区にわたると推測される。

この牟田ノ原に五島地方（上五島青砂ケ浦等）から信徒世帯 30 世帯が入植し、その後、お茶の栽培・製造等に転じる（俵町小教区 50 年誌 77 頁）。表 12 の信徒の地区割りおよび図 7 の上本山地区・踊石地区（牧の地町等）の信徒と推測される。

また、旧吉井町の自作農創設特別措置法に基づく開拓地は、『ふるさとの歴史・吉井町』によれば、高峰開拓団（吉井第一開拓団）と乙石尾共栄開拓団である（178 頁）。2 地区は皆瀬の北方にあたり、比較的近い。そのため 2 地区を合せて表 2 の②の吉井と推測され、表 12 の信徒の地区割りの吉井および図 7 の吉井地区（吉井町高峰）である。ある入植世帯は、「私たちは、昭和 31 年 10 月に佐世保の船越町から移住してきて皆瀬教会にお世話になっています。…神父様が……牟田ノ原教会にもきていただきました」（カトリック皆瀬教会創設 50 周年記念誌 25 頁）と記している。なお、この吉井の入植世帯（7 世帯）と牟田ノ原の入植世帯（23 世帯）を合計した 30 世帯は、五島地方からの移

住世帯数と一致する。

小佐々地区（横浦）

自作農創設特別措置法に基づく小佐々（長崎山）の開拓地は図9のように半島の山地の旧海軍用地であった。35世帯が入植し、各世帯は割当ての3町歩を開墾する（小佐々郷土誌427頁）。『よきおとずれ』（995号）によれば、開拓団の信徒は小佐々地区神崎・相浦地区浅子地区の出身である。

5. 第二次世界大戦後における宗教共同体の形成―外国修道会・戦後開拓地・炭鉱

第二次世界大戦後、表1のように佐世保市・周辺部に多くの教会・集会所（仮教会）が設立される。人口が急増する周辺地とともに戦後の開拓地・炭鉱に設立されたのが特徴である。また産炭地の公民館等でミサが行われる。

こうした教会の中には、佐世保市北部を管轄するカナダの修道会のスカボロ外国宣教会の関与するものが多い。1950年、スカボロ外国宣教会は長崎教区と20年間にわたる司牧宣教の契約を結び、島原半島の島原教会・愛野教会と佐世保地区の俵町教会・川棚教会・皆瀬教会を管轄する。1969年に俵町小教区、翌1970年島原教会・愛野教会・川棚教会を長崎教区に返還して、スカボロ外国宣教会は契約期間を終了する。俵町小教区で14人、皆瀬教会で5人の司祭が司牧宣教に従事する（俵町小教区50年誌76–78頁）。

皆瀬教会―俵町教会から独立

戦後の皆瀬地区は、佐世保市中心地区との交通事情が悪く、移動手段（バイク）を持つ俵町教会の外国人司祭が信徒の家でミサを行なっていた。この時期の子どもの公共要理（けいこ）は、中里に居住する女性信徒が担当する（カトリック皆瀬教会創設50周年記念誌9頁）。

皆瀬教会

初代婦人会長の手記によれば、その当時、皆瀬地区にあった炭鉱住宅を一軒一見回る「浮上活動」によって信徒世帯は10世帯増加し、産炭地区の炭鉱住宅でミサが行われるようになる（カトリック皆瀬教会創設50周年記念誌9頁）。「浮上活動」とは、おそらく炭鉱生活に入ったために宗教共同体を離脱した世帯を探し出し、再び宗教共同体の一員に迎え入れようとする宣教活動であろう。

皆瀬地区では、従来の農業世帯に戦後開拓の農家世帯と炭鉱従業員の世帯が加わって、信徒世帯が一定数に達する。こうした状況に対して、スカボロ外国宣教会が本部のあるカナダで資金集めを実施し、1954年、皆瀬教会が巡回教会として設立され、スカボロ外国宣教会の俵町教会助任司祭が別世帯助任として常駐する。1957年、皆瀬小教区として俵町教会から独立し、常駐の司祭が主任司祭になる（俵町小教区50年誌77頁）。

1968年に皆瀬教会はスカボロ外国宣教会から長崎教区に移管され、邦人司祭の担当になる。地すべり地帯のため教会の損傷が激しく、1969年、長崎教区の費用負担で2代目の教会が建設される。この当時の信徒世帯数は60世帯である。1969年、皆瀬教会は、大野教会の巡回教会に位置づけられる（カトリック皆瀬教会創設50周年記念誌7–9頁・19頁）。なお、巡回教会当初の2年間は、大野教会の助任司祭が常駐する別世帯助任であった。2007年、現在の教会が建設されている。

牟田ノ原教会・公民館―皆瀬教会の巡回教会

1956年、戦後開拓地の牟田ノ原地区に皆瀬教会のスカボロ外国宣教会の主任司祭によって巡回教会が建設される（俵町小教区50年誌77頁）[6]。高峰の開拓地に居住した先の信徒の手記によれば、当時の牟田ノ原地区には車道がなく、スカボロ外国宣教会の司祭は近くの峠までバイクで行き、徒歩で登ったという（カトリック皆瀬教会創設50周年記念誌25頁）。牟田ノ原教会のミサに参加していた先の信徒の話から、牟田ノ原教会の管轄が牟田ノ原と高峰（さらに乙石尾）だったことが判明する。この教会の所在地は、『長崎県のカトリック教会』（1976年）で佐々町牟田ノ原とされる。

1969 ～ 70 年に大野教会の助任司祭（皆瀬教会の別世帯助任）が、何度か牟田ノ原教会を訪問している。しかし 1971 年に大野教会の信徒が牟田ノ原を訪問した時は、すでに朽ちかけ利用されていなかったという（俵町小教区 50 年誌 77 頁）。

スカボロ外国宣教会の主任司祭は、表 1 の 3 つの炭坑の公民館でミサと公共要理を担当している（俵町小教区 50 年誌 77 頁）。皆瀬教会の信徒の「次々と、巡回教会が、設立され（牟田の原教会）（世知原）、神父様がバイクに乗って走りまわっている」（カトリック皆瀬教会創立 50 周年記念誌 9 頁）という記述から、世知原も常設の施設であったことがうかがえる。一方、「毎月一回芳の浦、世知原と、小教区区域にぞくさない里山の炭鉱部落の方にも巡回がなされ」（大野カトリック教会 13 頁）という記載からは、佐々町の芳の浦地区・里山地区と同様に、世知原地区も公民館ミサともとれる。なお、世知原地区は、2004 年、皆瀬教会から大野教会の管轄に移行している。

大野教会―俵町教会から独立

昭和初期、大野地区は中心部と結ぶ道路が整備されず、少数の信徒が祝祭日に三浦町教会に行くのみであった。佐世保北部地区に松山教会（俵町教会）が設立された後、大野地区の信徒は 30 世帯に増加する（カトリック大野教会創設 25 周年記念誌 15 頁・35 頁）。その結果、表 13 のように俵町教会のスカボロ外国宣教会の資金援助で、1961 年 6 月、大野教会が俵町教会の巡回教会として設立される。設立当時の貢献者の中には、前述の藤村五郎作が含まれる。

大野教会

表 13　大野教会建設のための寄附

俵町信者隣組（10 組）	167075
スカボロ会司祭等（6 人）	498850
スカボロ外国宣教会	3004000
一米国人	8400
匿名	10000
合　計	3688325

出典：『大野カトリック教会』47 頁。
注　：数字の単位は円である。

同年 9 月に柚木炭鉱が閉山になり、柚木の 25 世帯が他出する（カトリック大野教会創設 25 周年記念誌 49 頁）[7]。

1969 年、大野教会は小教区として独立し、皆瀬教会が巡回教会に転じる。しかし大野教会には司祭館がなく、世帯単位の献金（10 万円）と邦人司祭・信徒の追加献金・教会外の篤志家等の資金援助によって完成する。さらに 1982 年、現在の教会が完成する（カトリック大野教会創設 25 周年記念誌 22–23 頁・49 頁）。その後、大野教会共助組合（加入組合員 51 人）、葬式を執り行うラザロ会（加入世帯 53 世帯）が発足する。

表 14　大野教会の地区別信徒数

地区名	知見寺	松瀬	坂ノ下	楠木	大野	池野	矢峰	松原	田原	瀬戸越	泉福寺	世知原	地区外	合計
町名	知見寺	松瀬町 原分町	原分町	楠木町	大野町	松瀬町 柚木町 柚木元町	矢峰町	瀬戸越町 松原町	田原町 原分町	瀬戸越町 大野町	松原町 瀬戸越町	世知原 地区	–	
1986 年	4	20	15	5	8	12	7	8	12	11	10	–	5	117
2011 年	3	29	16	14	18	28	17	10	11	13	19	10	30	218
増減（%）	75.0	145.0	106.7	280.0	225.0	233.3	242.9	125.0	91.7	118.2	190.0	–	600.0	186.3

注：『カトリック大野教会創設 25 周年記念誌』92–946 頁・『カトリック大野教会創設 50 周年記念誌』76–77 頁を集計したものである。

大野地区の郊外化にともない信徒数は、表 14 のように 25 年間で倍増する。地区別では、川沿い（平地）の矢峰地区・池野地区・大野地区・泉福寺地区の増加が大きい。丘陵地・山間地の知見寺地区・田原地区は減少傾向にあるものの、楠木地区は約 3 倍に増加する。また管轄外の世帯が大幅に増加する。大野地区の信徒と同姓の世帯が多く、他出後も親族

表 15　親族世帯の増減と来住世帯

① 増加世帯

姓	1986 年	地区	2011 年	地区
瀬戸	6	大野 1・松頼 2・坂ノ下 1・地区外 1・田原 2	10	池野 2・田原 2・松頼 1・外 2・楠木 1・坂ノ下 1・大野 1
藤村	4	楠木 3・地区外 1	7	楠木 5・矢峰 1・松頼 1
平本	2	大野・松頼	6	松頼 1・泉福寺 2・池野 1・大野 1・地区外 1
山田	2	池野・田原	6	外 2・泉 1・松頼 2・池 1
松本	1	池野	4	大野・池・松頼・松原
鴛渕	1	楠木	3	楠木
川上	1	田原	3	松原・池野・矢峰
川崎	1	大野	3	大野 2・泉福寺 1
白浜	1	松原	3	泉福寺・松頼・池野
田代	1	池野	3	池野 2・松頼 1
荒木	2	瀬戸越・坂ノ下	3	地区外
末吉	2	大野・松頼	3	松原 1・松頼 2
田崎	2	松頼・瀬戸越	3	松頼 1・瀬戸越 2
中村	2	矢峰・松原	3	池野・泉福寺・矢峰
萩山	2	松原・大野	3	大野・楠木・地区外
山口	2	坂ノ下・泉福寺	3	坂ノ下・池野・松頼
大川	1	泉福寺	2	池野・池野
大山	1	坂ノ下	2	瀬戸越・地区外
尾下	1	知見寺	2	泉福寺・世知原
白井	1	大野	2	大野
浜口	1	松原	2	松原
松崎	1	知見寺	2	知見寺・矢峰
森	1	田原	2	池野・田原
山本	1	池野	2	松頼・地区外
楠本	1	池野	2	田原・松原
田中	2	田原	2	世知原・田原
鶴田	2	知見寺	2	知見寺・地区外
合計	45	−	88	増加率 195.6%

② 新たに居住した世帯（同姓複数以上）

姓	2011 年	地区
立石	4	池・瀬・泉・松頼
池田	3	世知原
市瀬	3	矢峰・泉福寺・池野
今村	3	池・大野・世
小川	3	矢峰 2・松頼 1
岡	2	矢峰・坂ノ下
橋口	2	泉福寺・地区外
橋本	2	池野・地区外
福田	2	泉福寺・坂ノ下
藤沢	2	池野
合計	26	−

注：『カトリック大野教会創設 25 周年記念誌』92–946 頁・『カトリック大野教会創設 50 周年記念誌』76–77 頁を集計したものである。
：地区名は、スペースの関係で、一部略称している。

のいる大野教会に在籍していると思われる。

表 15 は、姓を手掛かりにした信徒世帯と来住世帯の状況である。同姓間の親族関係は確認できないものの、趨勢はとらえられよう。そのうち① は 25 年間に増加した同姓世帯で、27 の姓の 45 世帯が 88 世帯に倍増する。とりわけ藤村家・鴛渕家は居住する地区内で世帯が増加し、分家の創出がうかがえる。他家も 1 世帯程度が同じ地区内あるいは大野教会の管轄内に分家を創出するか、親族が連鎖的移動したと推測される。② は 1986 年以降に来住した世帯のうち同姓世帯のいる家である。同姓間の親族関係は確認できないものの、同姓世帯の多さから親族単位の移住か、あるいは移住後に分家を創出したものと推測される。

烏帽子教会・横浦教会―戦後開拓地の教会

バス路線が開通していたものの、信徒は節約のために 300m を越える標高差の山道 7 ｋｍを往復して、毎週、俵町教会のミサに毎週参加していた。しかし徒歩の移動が大きな負担であったため、1956 年、草分けの糸永家の一室を民家御堂（仮聖堂）として

烏帽子教会

月に1回ミサが行われるようになる。当時は10世帯100人程度が参加している。

このミサ後の会合で、教会建築が話題になる（俵町小教区50年誌35頁・72頁）。建設資金の積み立てが開始され、スカボロ外国宣教会の司祭から準備金50万円が提供される。教会の敷地（510㎡）は糸永家が寄贈して、入植9年後（1963年）、総工費230万円で教会が完成する。烏帽子教会は俵町の巡回教会に位置づけられ、毎週ミサが行われ、善きサマリア人修道会のシスター等による日曜学校がミサの前に行われるようになる。1997年に現在の教会が完成する（俵町小教区50年誌72–73頁）。

佐々町（長崎山）の開拓地では、入植後も出身の神崎教会や浅子教会のミサに船で通っている（『よきおとずれ』（995号）。1955年頃から信徒の家を民家御堂として、浅子教会の司祭によるミサが月に1回行われるようになる。1989年、信徒の一人が土地を提供し、横浦教会が完成する。浅子教会の巡回教会に位置づけられ、毎土曜日にミサが行われる。建設の12年後の2014年に増改築が行われる（『よきおとずれ』878号）。現在の信徒数は35世帯である。

鹿子前教会・早岐教会・天神教会

1970年、船越地区の俵ヶ浦半島の船越教会から鹿子前地区が分離し、県道（SSKバイパス）近くに鹿子前教会が建設される。聖堂210㎡、司祭館105㎡で、建築費用は900万円である。信徒が700万円を負担し、残りは小教区以外からの寄附・献金に依拠する。

鹿子前教会の設立後、船越教会が鹿子前教会の巡回教会に転じる。しかし2地区が地区割りされるものの、信徒組織は小教区単位で形成している（鹿子前小教区設立25周年記念誌25–6頁・32頁）。

天神教会

1964年、早岐地区に早岐教会が建設される。1985年に2代目の教会に建てかえられる（長崎巡礼センター41頁）。天神地区は三浦町教会の管轄で、黒島地区・平戸地区・五島地方から移住した信徒が三浦町教会のミサに参加し、その後、民家を移築して民家御堂とし、1974年に「天神町祈りの家」を設立する。1986年に現在の教会が建設され、三浦町教会から独立し、天神小教区になる（長崎巡礼センター40頁）。

6. 都市・都市周辺部への移動と宗教コミュニティ形成

以上、長崎の半島・離島出身のカトリック信徒の佐世保市・周辺地区への移動に関して、移住当時の地域状況と職業等を含めた信徒の移動状況、さらに宗教コミュニティの形成に関して、教会の設立の経緯の検証をめざした。

佐世保市・周辺部の地域と産業

明治中期、海軍鎮守府・工廠が開設され、佐世保市の都市化・工業化が急激に進む。しかし、佐世保村の都市化・工業化が海岸地域に限定したため、周辺地域を分離して狭小の範域で市制が施される。以後、佐世保市は分離した佐世村を含めた周辺部との合併を推進する。この時期、海軍工廠に最盛期1万人を超える工員が就労するとともに、海軍関係の産業が勃興する。公共交通・私交通が十分でなく、戦前の海軍工廠や各産業、戦後の造船所等の従業者の居住地は、中心地区（谷・海岸地区）に限定されている。

その一方、海軍工廠等による工業化や急激な都市化は、近郊型農業の需要を高めることになる。とり

表 16　佐世保市の教会の設立の概要

教会名	設立時期	移住地の信徒		教会の設立前の施設等	教会設立時の職業状況	教会設立の主導・設立資金		教会設立までの年数		その教会の増設・新築等
		居住地	職業状況			設立主導	資金・援助	居住～民家御堂等	民家御堂等～教会設立	
三浦町教会（谷郷教会）	昭和初期（明治期）	北松地区	多様	集会所・民家御堂・谷郷教会	多様	長崎教区	長崎教区	数年	谷郷 1 年 三浦町 40 年	–
浅子（梶ノ浦）教会	明治期	相浦（浅子）	農業・炭鉱	梶ノ浦教会	農業・炭鉱	–	–	–		浅子に移転
大崎教会	大正期	相浦（大崎・大潟）	農業	–	農業・漁業・石工	–	–	17 年		戦中に教会新築
俵町教会（松山教会）	昭和初期	中心地区北・市北部	勤労・自営・農業	三浦町教会	勤労・自営・農業	–	パリ外国宣教会（土地売却金）	三浦町教科設立後 7 年		北佐世保駅に移転後、俵町教会に改称。新教会を世帯単位の負担欣で設立。
相浦教会		相浦（大潟）	農業	民家御堂・大崎教会	農業・勤労・炭鉱	信徒	信徒の原野の購入・交換。移転農家の建材利用	22 年	3 年	–
船越教会		船越地区		集会所	農業・勤労	–	祈りの場の移転による教会設立	–	同年	最初の集会所は、紐差教会の廃材の利用。
皆瀬教会	戦後（1950 年代）	佐世保市北部（皆瀬）		民家御堂・俵町教会	農業	スカボロ外国宣教教会	スカボロ外国宣教会	俵町教会設立後 16 年		2007 年、新教会設立
牟田ノ原教会	戦後（1950 年代）	皆瀬町・佐々町・吉井町（開拓地）		皆瀬教会	農業・製茶	–	スカボロ外国宣教教会	皆瀬教会設立後 2 年		祈りの場（仮聖堂）の可能性。
大野教会		佐世保市北部（大野・柚木）		俵町教会	農業・（炭鉱）・勤労	信徒	スカボロ外国宣教教会	俵町教会設立後 23 年		1969 年、小教区。1982 年新教会設立。
烏帽子教会	戦後（1960 年代）	烏帽子岳地区		俵町教会	農業	信徒（土地提供）	スカボロ外国宣教教会	2 年	9 年	1997 年、新教会設立。
天神教会		天神地区		民家御堂・祈りの家（三浦町教会）	農業・勤労	–	–	–	12 年	–
横浦教会		小佐々町		浅子教会	農業	信徒（土地提供）	–	10 数年	34 年	十数年後に増改築
早岐教会		早岐地区	農業・勤労	三浦町教会	勤労・農業	–	–	–		1985 年新教会設立
鹿子前教会	戦後（1970 年代）	船越地区（鹿子前）	勤労	船越教会	勤労	信徒	信徒	船越教会設立後 30 年		–

わけ中心地区の北側をとりまく丘陵地帯で山林原野の開発・開拓が進み、農地が拡大する。さらに第二次世界大戦前に農業地域と合併したことで、農家比率は1割近くに達する。第二次世界大戦後も佐世保市内・周辺部の都市化が進行する一方で、中央地区の後背の山地や周辺部の山地で開拓が進められる。

すなわち、佐世保市は工業都市のイメージが強いものの、佐世保市の発展とともに中心地区をとりまく丘陵地域・南部の半島地区、戦前の合併地区の丘陵地域・半島地域等の条件不利地区に開拓移住・農業移住が生じたのである。

長崎の信徒の移動の特徴

カトリック信徒世帯が佐世保市中心部に居住したのは、明治中期である。海軍工廠等の海軍関係の仕事や自営業等の信徒が多かったと推測される。

その一方で、第二次世界大戦前に移住した信徒世帯の多くが農業に従事していたことが判明した。信徒の就農は中心地区以外が大半であるものの、中心地区の北側でも確認された。

旧相浦町では、大潟・大崎半島の大崎が農業を目的とした明治・大正期の移住地である。また大正期の移住地である俵ヶ浦半島の船越地区も農業地区と確認でき、多くの信徒世帯が農業に従事してきた。

佐世保市北部の大野地区・皆瀬地区への戦前の移住も農業移住である。とりわけ丘陵・山間地域は農家比率が高く、信徒世帯の移住は就農目的であった。長い間、中心部との交通が不便であった崎辺半島の丘陵地の天神地区も農業地区であり、戦前期の早岐地区も農業比率および小作比率の高い地区であった。

第二次世界大戦後になると、周辺部でも第二次・第三次産業への就労をめざす信徒の移住が主流を占めたと推測され、また産炭地に移住する信徒世帯も急増する。

しかし、第二次世界大戦後も農業を目的とした新規移住や戦前からの農業の継続が、佐世保市・周辺地区の信徒世帯の大きな特徴である。こうした農業移住や営農の継続は、国の開拓政策・農地改革・旧軍用地の用地開放が大きく関係する。とりわけ開拓移住に関して、烏帽子岳地区で平戸（紐差）地区から連鎖的移動、皆瀬地区の北西の牟田ノ原・吉井（高峰・乙石尾）には五島地方から大規模な入植、小佐々（長崎山）に周辺地区から移住が判明した。

教会の設立の経緯

佐世保市・周辺部の教会設立は、表16のように、戦前期はパリ外国宣教会、戦後期はスカボロ外国宣教会という地区信徒外の資源の関与が大きいことが明らかになった。その後の教会の増改築・新築は、信徒の主導になる。

戦前期、教会設立の主導に関して、佐世保市中心部と周辺部で差異が見られ、戦後期、周辺部の小教区や近接地の教会間で、教会の新設や教会の位置づけに変化が生じる。

① 中心地区

第二次世界大戦前、佐世保市に設立された最初の教会は、中心地区の谷郷教会と相浦地区（対岸の半島部）の梶ノ浦教会である。いずれも立地の移転で三浦町教会・浅子教会に改名する。このうち三浦町教会は、長崎県北部の新たな拠点づくりという長崎教区の戦略的意図がうかがえる教区主導の教会設立である。明治中後期・大正期は、表11で見たように宗教施設の進出が著しい時期である。仏教寺院の進出に加えて、プロテスタント系の各教会が設立される中で、表16のように、周辺信徒による集会場・民家御堂を経た谷郷教会は、邦人教区となった長崎教区の主導で陸海交通の拠点の三浦町に移転し、北松地区一帯から信徒が集まる教会に発展する。

一方、佐世保市の人口集積とともに中心部の北側で農業世帯を含む信徒が増加し、北側の信徒が地区組織を三浦町教会内に結成する。その結果、大正期にパリ外国宣教会（当時の長崎教区の管轄）が購入した谷郷教会の借地の転売益で、松山教会（俵町教会）が設立される。

すなわち、中心地区の教会の設立は、当初は移住信徒による集会場・民家御堂から出発するものの、教会の設立には、教区の主導や外国修道会の資産の活用が関与したものである。

② 周辺部

一方、周辺部では、表16のように、明治期、相浦地区（対岸）の浅子に梶ノ浦教会（浅子教会）、大正期に大崎半島の台地に大崎教会が設立される。その後、民家御堂のあった大潟の信徒が増加し、相浦教会が設立される。船越地区では、集会所が大正期に設立された後に船越教会が設立される。いずれも信徒主導の教会の設立であるとともに、海軍施設の拡充による強制移転やその農家の廃材の利用で、

国策が関係している。

第二次世界大戦後には、カナダの修道会のスカボロ外国宣教会の関与で教会が次々に設立される。皆瀬地区では、1950年代後半、スカボロ外国宣教会によって皆瀬教会が設立され、さらに小教区になった皆瀬教会を拠点にスカボロ外国宣教会が、1950年代、戦後開拓地に牟田ノ原教会を設立する。1960年代、大野地区も隣接する産炭地の柚木地区の信徒世帯が急増し、スカボロ外国宣教会の資金援助で大野教会が設立される。

戦後開拓の烏帽子岳地区は、入植後、民家御堂の後にスカボロ外国宣教会の資金援助を得て、1960年代、烏帽子教会が設立される。同じ開拓地の小佐々町（長崎山）では、1960年代に民家御堂が設立された後、1980年代後半に横浦教会が設立される。

すなわち、周辺部では、信徒による集会所・民家御堂の設置から比較的長い年数をかけて信徒主導で教会が設立されている。戦前は、教会の設立・移転に国策（軍港）の影響が見られ、戦後は地区外資源（スカボロ外国宣教会）によって、戦後開拓地や産炭地に教会や集会所（仮聖堂）が設立されたのである。

③ 教会間関係

表16のように、教会の管轄を佐世保市内に限定すれば、第二次世界大戦前に三浦町教会から俵町教会が分離・独立し、さらに船越教会も分離し、その後、独立する。三浦町教会からの分離・独立は戦後も見られ、早岐教会と天神教会が分離し、その後、独立する。相浦地区では、浅子教会から大崎教会が分離し独立し、さらに相浦教会が大崎教会から分離・独立する。

戦後になると、スカボロ外国宣教会の活動によって、俵町教会から皆瀬教会・大野教会・烏帽子教会が分離し、さらに皆瀬教会から牟田ノ原教会や産炭地の仮聖堂・集会所が設立される。

興味深いのは、小教区内や隣接地に教会が誕生したこと、さらに主教会と巡回教会の入れ替えが生じたことである。佐世保市北部では、1960年代、大野教会が主教会になり皆瀬教会が巡回教会に転じ、早岐教会が三浦町教会・川棚教会の巡回教会の後に独立し、川棚教会が巡回教会に転じる。船越地区では、1970年代、鹿子前教会が船越教会から分離し主教会になり、船越教会が巡回教会に転じる。

図10　宗教コミュニティの類型

地区に占める信徒比率大

信徒間の同業関係の比率小	（経年化した）意図的コミュニティ	意図的コミュニティ	信徒間の同業関係の比率大
	信仰コミュニティ	（非農業型）意図的コミュニティ	

地区に占める信徒比率小

すなわち、戦前には、相浦地区の通勤・炭鉱世帯の急増によって相浦教会の分離があり、戦後には、佐世保市北部の勤労世帯・炭鉱世帯の増加による大野教会、船越地区の通勤世帯の増加によって鹿子前教会が設立され、主教会となる。いずれの地区も一定数の信徒の移住後に主教会から分離（しばしば独立）が生じている。すなわち、高度経済成長期の都市化・郊外化の進行によって信徒間に職業変容（通勤世帯の増加）が発生し、新たな分離が生じるだけでなく、新教会の信徒世帯数が主教会を上回ることで、主教会と巡回教会の逆転が出現したのである。

教会共同体のコミュニティ類型

北松地区の拠点教会の三浦町教会は、広大な管轄内に多様な職業の信徒が所在し、図10の信仰コミュニティの様相を有するといえる。

一方、第二次世界大戦前の周辺部への移住世帯の多くは農業志向で、長崎県の半島・離島の意図的コミュニティの出身世帯が同業の信徒世帯とともに、集会所・民家御堂さらに教会の設立という過程を通して意図的コミュニティの形成をめざす。この傾向は、戦後にも開拓地でも継続する。

しかし、都市化が進行する高度経済成長期に教会の新設を実現した地区では、戦前からの農業世帯に加えて来住の勤労世帯（・炭鉱世帯）を構成世帯にすることで教会の設立が可能になる。そのため、例えば、佐世保市北部で炭鉱世帯の「浮上活動」が行われるのである。また戦前に教会を設立した農業地区でも都市化が進行し、（分家・来住の）勤労世帯との混住化が進行する。

その結果、意図的コミュニティの様相を有した地区が、天神教会・早岐教会のように「（経年化した）意図的コミュニティ」に転換、あるいは前述のように、主教会・近接教会から新たな教会が分離したと見ることができる。すなわち、主教会が（経年化し

た)意図的コミュニティに転じる中で、意図的コミュニティ・信仰コミュニティあるいは（非農業型）意図的コミュニティが分離したと理解できよう。

戦後開拓地では、小教区から意図的コミュニティが分離する形で、俵町教会から烏帽子教会、浅子教会から横浦教会が派生したと理解できよう。

さらに興味深いのは、佐世保市の中心地区の教会が、信仰コミュニティの様相を有するものの、信仰の共同にとどまらず経済の共同が見られる点である。俵町教会における共助組合は、スカボロ外国宣教会の管轄教会にとどまらず北松地区の他の教会にも普及し、各教会の信徒の経済生活に貢献する。信仰コミュニティの信徒間に職業の相違が見られるものの、意図的コミュニティの残存がうかがえる活動である。

なお、本稿が平成 24 年度～ 27 年度科学研究費助成事業による研究（研究代表者叶堂隆三「移動と定住における類縁関係の発動と制度化に関する研究」課題番号 24530641）の成果の一部であることを付記しておく。

注

(1) 三浦町教会の司祭・信徒への聞き取りは、2014 年 8 月に、主任司祭の中村倫明神父と江上正則氏に実施した。なお、聞き取りの記録は、下関市立大学加来和典氏によるものである。

(2) 大崎地区に移住した大崎教会信徒の 3 兄妹（いずれも当時 89 歳・83 歳・78 歳）とその子供世代 2 人への聞き取りは、2006 年 8 月に実施した。

(3) 大野教会・皆瀬教会の聞き取りは、2015 年 12 月に大野教会主任司祭の中野健一郎神父に実施した。

(4) 谷郷教会の土地は、大正期、パリ外国宣教会のルマリエ師が購入する。パリ外国宣教会司祭が購入した中心部の土地の売却金が、北側の八幡町の広い土地の購入に充てられたと推測される。

(5) 相浦カトリック教会献堂 25 年誌には、大崎に 1930（昭和 5）年、説教所（教会）が設立されると記されている。

(6)『大野カトリック教会』には、牟田ノ原の施設はオラトリオ（祈りの部屋）とされている（13 頁）。

(7) 大野地区の世帯数は柚木の他出世帯をのぞいたものと推測される。

文献

相浦カトリック教会、相浦カトリック教会献堂 25 年誌、相浦カトリック教会、1985 年。

相浦郷土史編纂委員会、相浦郷土史、佐世保市合併 50 周年記念事業実行委員会、1993 年。

カトリック皆瀬教会、カトリック皆瀬教会創立 50 周年記念誌、カトリック皆瀬教会、2005 年。

カトリック大野教会、カトリック大野教会創設 25 周年記念誌、カトリック大野教会、1986 年。

カトリック大野教会、カトリック大野教会創設 50 周年記念誌、カトリック大野教会、2011 年。

カトリック俵町教会、俵町小教区 50 年誌―カトリック俵町教会 1952 ～ 2002　輪―、カトリック俵町教会、2003 年。

船越 5 ヶ町郷土史編纂会、船越郷土のあゆみ、船越 5 ヶ町連合会、2014 年。

市山・前田・松永・岩崎、紐差小教区 100 年の歩み、紐差カトリック教会、1982 年。

叶堂隆三、長崎県のカトリック信徒の移住と宗教コミュニティの形成―家族戦略から生成された地域戦略と外国人神父の宣教戦略―、下関市立大学論集 148 号、2014 年。

鹿子前小教区企画広報委員会、鹿子前小教区設立 25 周年記念誌、鹿子前カトリック教会、1987 年。

小佐々町郷土誌編纂委員会、小佐々郷土誌、小佐々町教育委員会、1996 年。

黒島カトリック教会記念誌編集委員会、信仰告白 125 周年―黒島教会の歩み、黒島カトリック教会、1990 年。

三浦町カトリック教会、三浦町カトリック教会献堂 50 年誌、三浦町カトリック教会、1981 年。

長崎巡礼センター、長崎巡礼、長崎文献社、2008 年。

長崎県教育委員会、長崎のカトリック教会（長崎県文化財調査報告書第 29 集）、1976 年。

長崎県農地改革史編纂委員会、長崎県農地改革史、長崎県農地改革史編纂委員会、1953 年。

長崎県知事公室世界遺産担当、長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・地区調査報告書　黒島地域、2008 年。

農林省農務局、開墾移住ニ関スル調査（第 2 輯）、農林省農務局、1934 年。

大野郷土誌編集委員会、大野の郷土誌、大野地区町内会公民館連合会・大野地区公民館、1988 年。

佐々町郷土誌委員会、佐々町郷土誌、佐々町、1981 年。

佐世保市皆瀬小学校同窓会・ふるさと皆瀬の郷土誌編さん委員会、ふるさと皆瀬の郷土誌、佐世保市立皆瀬小学校・同窓会、1982 年。

佐世保市南地区郷土誌調査研究会、烏帽子は見ていた―佐世保と南地区・21 世紀への記録―、佐世保市南地区町内連絡協議会、1997 年。

佐世保市総務部庶務課、佐世保市史　産業経済篇、国書刊行会、1956 年。

佐世保市総務部庶務課、佐世保市史　政治行政編、国書刊行会、1982 年。
佐世保市役所、佐世保郷土誌、佐世保市役所、1919 年。
褥崎カトリック教会編集委員会、褥崎 128 年―褥崎小教区沿革史―、褥崎カトリック教会、1992 年。
植松英次、大野カトリック教会、大野カトリック教会創設担当者、1961 年。
吉井町郷土誌編纂委員会、ふるさとの歴史・吉井町、吉井町教育委員会、2001 年。